「今日の説教、聴き手のために」　2009/3/29　明治学院教会(149)

（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「剣を取る者は皆、剣で滅びる」

マタイ２６章４７節－５６節

1、私は先週山口県岩国に行ってきました。山口県立大学の三宅義子教授（女性学）の依頼で「ベトナム戦争と岩国市民」のテーマで研究発表をするためです。結論からいうと戦争は暴力で、市民は（戦争に協力した人もいるけれど）は平和への努力をした。そこに反戦米軍兵士がいた事が大きかったという事を述べました。

2、福音書の受難物語のイエス逮捕の場面に「剣」の話が出てきます。大祭司の手下に打ってかかって、片方の耳を切り落とした（マルコ）。イエスがその耳を癒された（ルカ）。剣を抜いたのはペトロだった（ヨハネ）。しかし「剣を取る者は皆、剣で滅びる」(26:52) の言葉はマタイのみです。古い諺がイエスの言葉とされます。（創世記６：９［人の血を流すものは、人によって自分の血を流される」黙示録１３：１０「剣で殺されるべきものは剣でころされる」が関連する）。諺ですがイエスの考え方をよく表しています。

3、この言葉は不思議な言葉です。一語である人の生涯を動かす力を持ちました。私は、沖縄の伊江島の農民の土地闘争の小屋でこの言葉に出会いました。この人は、沖縄の北部、本部町の貧しい農家の生まれです。父の願いで師範学校に行きますが、学費のため無理で、病気になり、療養で別府のキリスト教の牧師に世話になり信者になります。元気になり南米の移民に加わります。過酷な労働で帰国をします。京都の一灯園で西田天香に師事、諭されて、帰沖、伊江島で結婚、雑貨屋をやり、お金を作って、土地を買い続け四万坪に木を植えます。デンマークのグルンドウィーの思想を継ぎ学校を作り神と人と土を愛する人を育てることを理想とします。一人息子を教育者に育てますが、沖縄戦で失います。伊江島の畑と森は米軍の侵攻で徹底的に破壊され土地を収奪されます。沖縄で初めて土地闘争を戦います。「乞食行進」(1955-56) の訴えをします。その名は阿波根昌鴻さんです。岩波新書に『米軍と農民』『ぬちどう宝－いのちこそ宝』が残っています。土地を耕して、作物を作り、いのちを養う農民が、一番神に近く偉い人と考え、戦争の暴力行使者は低劣だと考えます。晩年自宅の側に「ぬちどう（いのちこそ）宝の家」（資料展示館）を建て戦争で使われたものを拾ってきては展示し、若い人への語り部を務めます。

「戦争を起こす人間こそ本当の悪魔だ」（『米軍の農民』p.218)と述べます。教えを説くだけの人は「悪魔の召使だ」、「剣の放棄」を実行して生きてこそ神に近いといいます。阿波根さんは、２００２年3月２１日１０１歳（肺炎）で亡くなられました。「学習こそ平和の武器と説きつづけた人」（朝日新聞追悼文）でした。

4、マタイの「剣を・・・・」の根底を支える大切な言葉は５０節のイエスの「友よ」という言葉です。ユダに向けられます。パスカルは『パンセ』（５５３）で「－－－イエスはユダのうちに敵意を見ず、かえって自らの愛する神の命令を見給う。敵意を認めなかったからこそ、彼はユダを友と呼び給もうた。」。剣よりも愛と信頼が勝ることが「イエスの出来事」です。私たちもその「出来事」の跡を辿りることができるように祈り続けてたいと思います。